

都市開発と文化・景観保護



西村幸夫
東京大学教授



岡部明子
千葉大学大学院工学研究科
准教授。建築家



遠藤彬
銀座通連合会副会長。東京銀座
ロータリークラブ会長

景観と街のマネジメント

西村 本日は、まちづくりと景観というテーマでいろいろと考えていきたいと思えます。

2004年に景観法が公布され各地で積極的な取り組みが行われるなど、景観を大切にするという考えが時代の大きな流れとなつていますが、そもそも景観はなぜ大事で、それを守ることにどうやってというメリットがあるのか。ヨーロッパ滞在の経験が長くて、いろいろな面で日本と海外を比較して見る目を持っていらつしやる岡部先生にまず口火を切つていただきたいと思います。

岡部 景観と言いますと表層的なものという印象を持ちますが、それが大切だと私は思います。街を人に諭えると分かりやすいのですが、ある人の姿、顔、形、服装はその人の内面を表しているわけです。景観は街の内面を映している、つまり、景観問題は内側の問題の表れであるという側面があるということです。ですから、見

てくれだけを取り繕つても浮いた感じがするし、よく問題になるようにテーマパークのような街並みになってしまつていうわけです。

半面、例えば学校で服装、身だしなみ、髪形をチェックするということは、決して見た目を良くするためだけにやっているわけではありません。外見を整えることによつて、それが内側に反映していくこともあるわけです。景観も同じで、景観を整えることで中身をマネジメントしていくという側面もあります。つまり、街において社会と景観は、人と外見のように相互に影響する関係にあるわけです。ですから、内面の鏡としても重要であるし、景観をコントロールしマネジメントすることで社会を変えていくことにもなると思えます。

西村 服装の乱れがその人の生活の乱れや思想の乱れを表しているのと似たことが、街についても言えるということですね。

そういう意味では、銀座は景観と街のマネジメントが整っていると評価されていますね。

遠藤 娘たちが住んでいるのでよくパリに行きますが、建築が石造りで何百年と変わらない。また街の表側が店で内側は住宅やアパートになっていて、そこで生活が全部できる。

銀座も以前はそうだったと思うのですが、いまはほとんど商店街です。しかし、街路は昔から変わらないし、そこに建物や商店が建つて一つの景観を成している。皆さんが銀座に来て、「銀座」を楽しんでいただけるヒューマンスケールの街路になっているわけです。そういう特徴が銀座にいる人たちによつてつくられ、それがいまも守られているということだと思えます。

西村 いま「銀座」という言葉が出ましたが、それは文化を象徴していると思えます。景観も文化ですし、銀座に来ると最先端のものや面白いものがあり、歩いていて楽しいというイメージがあります。それは、街全体で努力してきた結果なのではないでしょうか。

遠藤 街自体にそういうシステムがあります。



銀座・歩行者天国



パリ市街地



西村幸夫 (にしむら・ゆきお)

東京大学教授。工学博士。
東京大学都市工学科卒業、同大学院修了。
明治大学助手、東京大学助教授を経て、
1996年より現職。この間、アジア工科大学助教授(バンコク)、MIT客員研究員、
コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。
専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画、市民主体のまちづくり論など。
主な著書に『西村幸夫 風景論ノート』『西村幸夫 都市論ノート』『環境保全と景観創造』(鹿島出版会)、『都市保全計画』(東京大学出版会)、『都市美』(編著、学芸出版社)など。

銀座通りと晴海通りに面している企業や商店が加入している「銀座通連合会」という、すでに90年の歴史を持つ組織があります。そこが核になってまちづくりを行っています。もともとは地主さんが自分で店を持っていることが多かったので、自分の店の前や周りをきれいにしよう、街全体で銀座を良くしていこうという意識があったと思います。

また、2001年には銀座通連合会が中心になって「全銀座会」という組織を新たにつくりました。銀座は、銀座通りや晴海通りの他にも並木通り会など通り単位でまとまっていますが、それ以外に面的なまとまりとして町会というのがあります。さらに、業界団体もある。それらの団体を全てまとめた組織が全銀座会です。

初めはそれぞれの団体間かなりの温度差がありました。しかし、何か銀座で問題が起こった時に皆さんのコンセンサスをまとめることができるシステムがないといけない。それまで、銀座全体としての意見をまとめていく仕組みがありませんでしたので、そういうシステムをつくったわけです。何か問題が起こったら、銀座街づくり会議から全銀座会にフィードバックして、そこで皆さんに考えてもらい、コンセンサスを得て対応していくわけです。

西村 なるほど。街の見た目だけでなく、その裏にいろいろな仕組みがあって、そこにおられる方々が意思の疎通を図りながら、長いこと努

力しておられるというわけです。

岡部さんに伺いますが、ヨーロッパでも地域コミュニティがベースになっているというケースは多いのでしょうか。

岡部 私たちがヨーロッパの街を歩いていて、いい感じだなと思うのは、中世の城壁でかつて囲まれていた都市のことが多いです。シエナ旧市街とか、トスカーナの小さな都市とか、カルカソンスとか。そういう中世の都市域はたいてい100haほどで、そこに1万人くらいの人暮らしていたわけです。ちょうど銀座程度のスケールですね。いま遠藤さんのお話を伺っていて、銀座はコミュニティの構造が、ヨーロッパ中世の都市に似ていると思いました。当時は同業者の組合、ギルドで通りが一本ずつあって、それをまとめて空間的には城壁の中にある一つの都市、共同体というものがあつた。それは、いまのお話でいうと各通り会や町会があり、そして全銀座会という街全体をまとめるプラットフォームがあるのと同じです。つまり、二重の仕組みがあつたわけです。

銀座でもいまは住んでいる人が減ってきたというお話がありました。ヨーロッパの都市でも美しく保全された都市では住む人が少なくなってきました。そもそも街というのは、いろいろな職業の人がそこで働いて住んでいる世界があるということが魅力だったのですが、それをどうやって維持していくかがだんだん難し

くなっています。美しければ美しいほど観光客に人気が出て、金の卵を産むにわたりを見失うようなことが起きてしまっています。

景観保護と開発

西村 銀座の通りは江戸時代からの通りがベイスになっています。またヨーロッパの街も中世からの城壁内の街路のパターンが基本になっています。そういう場合は、古いものを大事にしていることで景観が守れるということがイメージできるのですが、一方、再開発はそれとは違って新しいものをつくるわけです。その場合、どう考えるのかという問題がありますね。

岡部 長い時間軸で考えて良い景観をどう残していくかということが重要なのではないのでしょうか。欧米ではそれに関して長いこと論争が行われてきました。19世紀末から始まったモダニズムでは、新しい近代的・合理的な理念で都市をリセットするという動きが起きて、パリもそれでもかなり破壊された時期があつたわけです。しかし、どんどん歴史のものが失われていくのを目の当たりにして、市民の間にはいけないという危機感が生まれました。ティポロジヤ (Typology ≡ 類型学) (注1) という考え方が出てくるなど歴史のものを保全していく方向に変わっていったわけです。ところが、保全していくと今度は歴史のもののルールに縛られて、現在の創造性が失われてしまうということが起きる。そこで建築家などから、それを打ち破ろうとする動きがまた出てきた。古い景観を守る極と新しい景観をつくる極の間で大きく振り子が揺れているような状況です。

食品の安全性に関してトレーサビリティ(注2)ということが注目されていますが、都市の開発と保存との間で振られてきた歴史を見てみると、景観においてもトレーサビリティのある景観が良い景観だと言えるのではないのでしょうか。銀座の街並みは、明治期にそこで生活があり



シエナ (カンポ広場周辺) ©edobric-Fotolia.com



シエナ (路地)



カルカソンス ©stephy33-Fotolia.com

(注1) ティポロジヤ (typological) 類型学。対象を型や特性によって分類し、その本質や相互の関連性を考察する学問的手法。

(注2) トレーサビリティ (traceability) 商品・製品の生産から消費・廃棄までの過程を追跡・溯及できること。



岡部明子 (おかべ・あきこ)

千葉大学大学院工学研究科准教授。建築家。環境学博士。

東京大学工学部建築学科卒業。磯崎新アトリエ (バルセロナ) 勤務の後、東京大学大学院修士課程を修了し、再びバルセロナへ。堀正人と Hori & Okabe, architects を設立し、建築などのデザインを手がける。2004 年より現職。主な著書に『サステイナブルシティー EU の地域・環境戦略』(学芸出版社)、『持続可能な都市』『都市の再生を考える 1-都市とは何か』(共著、岩波書店)、『都市のルネッサンスを求めて—社会的共通資本としての都市 1』(共著、東京大学出版会)

店があった頃、さらには江戸の頃からの街路パターンも引き継いでいる。だから、道を歩いているとそうした過去の空間までたどることができるわけです。過去の痕跡が再開発で完全にリセットされてしまうと、街の履歴をたどれなくなる。そうすると景観が貧しくなると思うのです。したがって、道を歩いていると古いものが身体で思い起こせる街が良い景観だということ。しかし、古いものが良くて新しいものが悪いということではない。重層してプロセスが分かる街が良い街だと思います。

西村 つまり、新しいものでもトレイサブルなうまいつくり方をすれば、うまくマッチするから良いものになるということですね。

遠藤 開発される時のメカニズム、つまり、いかに住民と行政が協議してうまくやっていくかということが大事だと思います。われわれは、協議型のまちづくり、ということを中央区のまちづくりのルールに取り入れてもらいました。銀座は古い街並みとはいえ、建っているビルは別に古いものだけでなく新しいものもあります。新しいものが建つ場合でも一定のルールがあつて巨大なもの建ちにくいということにしたわけです。いま高層ビルが建つと、中に入るテナントの顔ぶれはほとんど同じです。それでは、あまり魅力的とは言えないという気がしません。銀座に全てスーパーブロックのようなものをつくとすると銀座通りの1丁目から8丁目

まで、16の超高層ビルで完結してしまいます。それでスーパーブロックの再開発案があつた時に反対して、少なくとも56メートルという高さを守ってほしいということでも地区計画を策定した。銀座は基本的には何でもウエルカムなのですが、高さはこの位にしてほしいということだけは言っていないかと街路が壊れてしまう。西村 ある程度の大枠は決めて、その中で競い合つて良いものをつくってほしいということですね。

遠藤 ええ。いま誇りに思っているのは、銀座通りには駐車場の入り口が一つもないということです。広い歩道を歩行者の方々に楽しんで歩いていただきたいということで、駐車場の入り口で歩道を切り裂くということは一切していません。これは珍しいことだと思います。

ただ、その弊害というののもあつて、裏側は駐車場の出入り口だらけになってしまい、賑わいが失われる。いま、それを何とかしようとしていて、大型の施設をつくる時には少し余分に駐車場をつくつてもらい、小さなビルにはそれぞれ入り口を少なくする。そういうことも銀座ルールとしてつくっています。

西村 銀座にはそういう細かいルールやチェックするシステムがありますが、これは日本の他の街でも参考になると思います。行政から与えられたものではなく、地元の人々の間からそう

いうものが生まれてきたというのは素晴らしいことです。それはやはり、銀座のお店のオーナーの方々が「これは銀座らしい」「これは銀座にふさわしくない」と感じる感覚を持ってもらえるからですね。

遠藤 われわれはそれを「銀座フィルター」と言っています。そうした目に見えないフィルターによつて銀座の街並みが守られてきた。しかし、いまはこういう時代ですから放つておくとどんどん開発が進んでしまいます。そこで、大きな開発計画があつた時にみんなで集まって「本当に銀座はこれでいいのか」ということを話し合つた。また、専門家の先生にも来ていただいて盛んにシンポジウムをやりました。それで、銀座に超高層ビルはいらないのではないかと皆さんの意見が出たものですから、行政も含めて動き始めたということです。

西村 そういうことを他のところでやろうとしても、土地を持っているオーナーの方は建物が高い方が得になると思つて賛成しないということが多いのですが、銀座の場合はそうならない。それはどうしてですか。

遠藤 地権者の方は経済性からすれば200メートルの超高層ビルを建てた方がいいわけです。しかし、皆そうなつた時にいままでも銀座の経済的価値というものを保つていけるのかどうか。銀座が超高層ビル、スーパーブロックだけになつたら、商店が全部ビルの中に閉じこもつてしまい、歩いて楽しむこともなくなつてしまいます。やはり商店街はある高さで統一する方がいい。周りの街が高くなると銀座は盆地のようになってしまいますが、ここに来ればホットとするという街があつてもいいのではないかとということになつたわけです。

西村 その辺の感覚はヨーロッパの街に似ていると思います。最初からバラバラだとなかなかできないでしょうが、もともと銀座には31メートルの高さ規制を守つてきた結果、建物の高さ



銀座・並木通り



銀座・みゆき通り

